



大本山永平寺



傘松閣絵天井の間に掛かる達磨図 可庵和尚 筆

達磨忌

朝露が冷たく感じられるようになり、秋も本番を迎えます。十月五日は、禅宗の初祖である菩提達磨大師のご命日です。達磨大師は五世紀ごろ、南天竺にある香至国の第三王子として誕生し、般若多羅尊者の法を嗣いでお釈迦さまより二十八代目の祖師となりました。

晩年、師より受け継いだ禅の教えを広めるため中国へ渡ります。そのうわさを聞いた梁の武帝は達磨大師を都に招き入れ、問答を交わしたことは有名なお話です。

「これまで多くの寺を建立し、僧侶を庇護し、仏教に帰依してきたが、どれほどの功德があるか」との武帝の問いに対し、「無功德（功德は無い）」と達磨大師は答えられたのです。

行いに対し功德や見返りを求めることは、欲望を募らせるだけである。仏教に帰依するとは、結果を求めることなく仏道をひたすら歩むことである。残念ながら無功德の真意は伝わらず、達磨大師は大河を渡り、北魏の嵩山少林寺において壁に向かって九年間独り坐禅を続けられたと伝わっています。

その禅の教えが道元禅師を経て我々まで伝えられたことへの報恩感謝と、達磨大師のご遺徳を偲び、四日・五日の両日にわたり厳かに法要が営まれるのです。



大本山總持寺



茶所新設工事



天真閣改修工事

大遠忌に伴う伽藍の耐震改修・新築工事

来年の峨山禅師六百五十回大遠忌を控え、九月より十一月末までの大遠忌記念参拝が始まりました。期間中は毎日全国より大勢の団体参拝者が上山され、境内は賑やかさを増しております。

特に十月は十二日から十五日までの四日間、御開山瑩山禅師・二祖峨山禅師（お二人あわせて御両尊と称す）を偲んで供養申し上げる「御両尊御征忌会」が営まれます。

また、大遠忌記念事業の伽藍耐震改修工事なども順調に施工されております。現在は、天真閣と祥雲閣の改修工事に加え、地上回廊の新設と、地域の要望を請けて地元の協賛者の御支援による茶所（大駐車場）の新設工事が進められており、境内は工事車両がせわしく行き来しております。

修行の立場からいえば時節はもう冬ということになり、總持寺では十月二日より冬安居制中に入りました。

冬安居は正月明けまでの一〇〇日間、首座和尚を中心に修行僧たちの集中修行が続きます。

また、二十四日と二十五日の夜、LED照明や太陽光発電で新たな夜景の創造を試みるイベント「東アジア文化都市2014横浜スマートイルミネーション鶴見」が總持寺を会場に開催され、大勢の来場者が期待されます。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

紫陽花の雨に半身の江戸しぐさ

東京都 伊奈 三郎

評 雨にすれちがうとき互いの傘を外側に傾げ、肩も引き譲り合う様。今は失われつつある江戸っ子や江戸商人の一步退き相手を思いやる粋な生活哲学。紫陽花の雨と藍に添う^{ほた}嫺やかな妙齡の姿が浮かぶ。

言ひそびれ扇子を少し使ひけり

山口県 御江やよひ

評 扇子を使うことで自分の気持ちをわずかにはぐらかす。誰もこんな経験はある。そんな繊細な心の動き、有り様をさりげない表現をもって語ったところに良さがある。

◆ 笹百合に小雨が似合ふ山路かな 和歌山県 田崎よし子

◆ 蜥蜴^{としかげ}の尾切れて平和を脅かす 千葉県 蛭名 節昌

◆ 梅雨深し妻に付き合ふ診療所 長野県 下島 博

◆ ぼうふりの音なき騒ぎ手水鉢 千葉県 鈴木 英子

◆ 駒と句と二兎追ふ暮らし梅雨に入る 新潟県 大橋 恒次

◆ 梅干して主婦の座しかとありにけり 東京都 長谷川 瞳

◆ 赤い口開けて鴉の暑さかな 岩手県 関谷 新一

◆ 手荷物^{てぶつ}の徐々に重たき薄暑かな 北海道 大野 節子

◆ 肩を打つ滴の力に合掌す 岡山県 有元 克英

◆ 独り居のテーブル広し水中花 茨城県 坂内とくゑ

◆ 亡き夫の囁く如し風鈴は 三重県 遠藤 芳江

* 選者吟

案山子等の何を恐れてヘルメット

五灰子

* 作句小見

第三句、雨の笹百合に歩きたくなくなります。四句、危ない平和と今世界は。五句、梅雨深しが心を語る。六句、手水鉢にもある世界。日々の一句一句は自分史の積み重ね。自分の過去の句を振り返るのも楽しいですね。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

立ち読みの本に見つけし兄の句を誦そらんじながら店を後にす
茨城県 太田 弘美

評 偶然書店で立ち読みした文芸誌に兄の名の俳句を見つけた作者。その驚きとよろこびが四句目の「誦そらんじながら」から生き生きと立ち上がって来る。買って帰らなかつたところも様々想像させる。

老いたれど生命の炎まだ残り沈む夕陽に心さ
わがす
岩手県 池田 眸

評 夕陽の美しさにわけもなく心がさわぐことに、何か得体の知れぬ力を感じたのだろう。それを「生命の炎」と捉えたところが作者らしい表現となった。

- ◆ 梅の実は甕の肩まで水を上げ紫蘇にたたまれ静かにねむる
三重県 野呂 と志
- ◆ 泣きながら麦秋の道駆けてったあの日の父の声大きく
東京都 鈴木 正作

◆ 棲みつきし季節外れの海鵜連れ船腹近く沈みては浮き
三重県 山下 利夫

◆ 涙ため幼は出口を指差しぬ眠いのだろうがばあばの孤独
山口県 濱田 道子

◆ バスを待つ棒一本の停留所彼は誰れどきを螢舞ひ初む
秋田県 小田篤恭 葉

◆ 朝に夕に犬散歩さす人かげにヤストの日々が思い出されぬ
神奈川県 安永 廣子

◆ 賢いカラスも事故に遭うらしい黒羽根光らす車道の骸
福岡県 森 信成

◆ 久に会ふ亡夫の笑顔と甲州弁雨音が消す午後のもどろみ
東京都 津久井すみ子

◆ 草をとるおうなの姿に母を見るいつしか我も丸く小さく
栃木県 大武 幸子

◆ 強面の小父おじさん一人のベランダにミッキーマウスのバス
タオルあり
奈良県 鈴木 重雄

*選者詠

夫とわれの小さき空間行き来して終える生
命とかなしみで見ると
ちづ

*作歌小見

安永さんの一首に触発され拙詠も犬の歌です。ペットとして生を受けた小動物の命について考えているうちに、飛躍するようですが、この現在も戦争で多くの命が断たれている現実に至りました。戦争のない世界を願わずにはいられません。